

2010年6月25日

／ 車椅子臍に真向かう夏の坂 ／

この句、ネットの句会に投句しました。すると「車椅子で坂を漕ぎあがるには、自分のお臍が見えるほどに、前屈みになって力をこめないとなりませんものね」とコメントが出ました。

良い悪い・取る取らないは別にして、感想を述べるのが、この句会の特徴なのです。私は、笑ってもらえると思ってましたから、がっかりしました。

でも、無理ないんですね。

車椅子といえば、左右の外輪を掴んで漕ぐのがあたり前ではありますから…。私のは、電動の椅子ですから、漕ぐ必要はないんです。

ちゃんと座ったままの姿勢で、正面を見て移動します。すると目線の高さが、ほどよく、向かってくる人の腹部になります。

この時は折から、大胆な服装の、若い婦人が二人、坂の歩道を下ってきたのです。どういう状況になったか…ご推測ください。そこが、この句の笑わせ処です。

ご異論もあるでしょうが、私は、コトバの綾で笑わせるのではなく、状況・情景を描写して笑い創る…それが、滑稽俳句の本来の在り方ではないか、と思っているのです。

／ パンチラの酷暑に乾く臍の胡麻 ／

この句は、前の句に比べれば、かなり主観的な句です。二人の婦人にすれ違った後、その二人の、お臍の中を想像したのです。

この句は、ネットの句会に投句しませんでした。投句していれば「行儀の悪い、不真面目な……」というコメントが出たであろうと想像します。真面目俳句を創っている方ばかりでしたから。